

序章

日々の報道には、世界中で起きる紛争や対立、テロ事件に関するニュースが少なくない。その背景には、民族、文化、宗教の違いによる反目、あるいは経済的、社会的格差等の問題があるといっても過言ではなかろう。こうした状況にある国家においては、本来政治的一体感をもつはずの国民は、民族的、歴史的、言語的、宗教的、文化的な亀裂によって引き裂かれているという現実がある。

このように多民族、多言語、多宗教国家といわれる様々なエスニック・グループから構成される国家において、彼らをどのようにまとめるのか、どのように国家を発展させるのか、また、国民としてのナショナル・アイデンティティをどのように形成していくのか。戦後 70 年の間、これらの問題に対処するなか、大きな紛争へと進めさせることなく、国民形成を果たし、経済的発展も遂げた事例はないのか。このような問題意識から、本研究は始まった。

本論は、こうした問題関心を前提にマレーシアの国民形成における華人の統合に関する研究を行おうとしたものである¹。マレーシアがいかにして、エスニック・グループ間のバランスを保ちながら国家として発展したのか、統合と国民形成の様態とは何か。特に、経済的影響力を有しながらエスニック・マイノリティの立場にあるマレーシア華人を中心に、マレーシアの国民形成の過程を考えたいと思った。さらに、コミュニケーション政策がどのような役割を果たしてきたか、その成果を明らかにしたいと考えたのである。

日本におけるマレーシアに対する学術的研究は、1980～90 年代をピークに減少している感がある。また現在、マレーシアの国民統合について研究している研究者は非常に少ない。さらに統合に関する資料は 2000 年代ごろまでの、マレーシアが右肩上がりに成長していった時期に書かれたものが多い。

本研究では、これまでのマレーシアに関する先行研究を精査した上で、現在の実情を勘案しながら、マレー人や華人といった当事者ではない第 3 者の視点で、マレーシアの国民形成について検討、研究したいと考えた。そこにこの研究の意義があると考え。さらに、マレーシアの国民統合における、コミュニケーション政策の役割と機能につい

での研究は、これまで十分されてきているとはいいい難いことから、この点に着目したことも、本研究のオリジナリティーであると考ええる。

次に、本研究の中心に据えている統合という概念についてである。統合 (integration) と統一 (unification) は、必ずしも明確に定義され、区別して使用されているわけではない。辞書では、ほとんど区別なく使われているとあってよい²。しかし、石川一雄は、これを区別している³。それによると、まず、統一は、一つにすること、つまり集権化である。単なる集権ではなく、異質のものを吸収・同化して同質的な一つのまとまりにすることである。これに対して、統合とは、システムを構成する下位システム間の自立性、相互性等を前提とした、一体化を意味している。つまり、構成単位の自治・自立が確保され、多元化した状態である。統一は同化政策によって中央集権的に一体化することだが、統合は異質性を前提にして、多元的に一体化することだといえよう。本研究では、この定義を踏まえ、同化や一元化する統一ではなく、多民族、多言語、多宗教のマレーシアの国民が、統合し、国家、社会を形成する国民形成の過程に焦点をあてようと思う。

マレーシアは、ASEAN 諸国のタイ、インドネシア、ブルネイ、シンガポール、フィリピンと接し、東南アジアのマレー半島南部とボルネオ島北部を領域とする連邦立憲君主制国家で、イギリス連邦加盟国である。都市国家であるシンガポール、産油国であるブルネイを除けば、ASEAN 諸国の中でも群を抜く経済発展を成し遂げている。そのマレーシアが、エスニック・グループ間の対立を表立って先鋭化することなく、安定的な政治のもとに、国民統合あるいは国家形成を成し遂げていると仮定し、強固な同族意識、中国的価値観を持つ華人が、いかに変化しマレーシアの一員となっていたのかを探っている。また、コミュニケーション政策については、これまでマレーシア華人を中心とした研究が十分されてきているとはいいい難いことから、この点に着目している。

マレーシアを取り上げた理由は、第1に、マレーシアの歴史的背景にある。マレーシアは、自然発生ではなく、外的要因である植民地支配により、作られた多民族、多宗教、多言語、多文化社会である。植民地政府の統治政策は、ポストコロニアル時代のマレーシアの国家形成に影響を与えたのか否か、そしてマレーシア独立後、だれがどのような舵を取り、エスニック・グループの国民形成を図ったのかに関心を抱いた。第2に、マレーシアが独立、その後の開発に成功していることである。マレーシアはインドネシアやフィリピンのように、内戦や民族紛争による流血をすることなく、平和裏に独立し、経済的発展を成し遂げている。周辺国とは違い、エスニック・グループ間の覇権争いは

生じなかったのか、同化政策をとることなく、国家形成を果たせた理由はどこにあるのかを探求しようと考えた。第3に、イスラームが主流の国家であることである。東南アジアでエスニック・マイノリティとしての華人の割合が最も高いのがマレーシアである。欧米とは異なる宗教国家において、ムスリムではない華人がどのように地位を築いてきたのかに、大いに興味を持ったからである。

本研究の対象時期は、マレーシアの民族構成の基礎をつくったイギリス植民地政府の統治時代から、21世紀初頭までとしている。また、情報環境は、インターネットの出現によって大きな変化を遂げていて、国家のコミュニケーション政策に関わりなく、市民による情報のボーダレス化が起こっている⁴。このことを加味すると、対象は膨大な範囲となるため、本研究では取り上げないこととした。

加えて、本論は宗教の問題に触れていないのではないか、という指摘があるかもしれない。敢えてそれに言及しないのは、以下の理由による。

マレー人にとってイスラームは、存在理由そのものである。彼らが華人でも、インド人でもなく、マレー人であることアイデンティティの1つは、ムスリムであることにある。自分らの特権的地位を保持する拠り所として、イスラームを押し、イスラーム化を進めてきている。一方、イスラームは国教ではあるが、華人、インド人に改宗を強制しておらず、憲法で信仰の自由も保障している⁵。イスラームで統合を図ろうとするなら、華人、インド人の反発は免れず、分離、独立等の分断の危機に陥ると思われる。政治、経済的に相互に補完してきたエスニック・グループ間で決定的な亀裂が生じ、それが国家の存亡に関わることにもなりかねないかもしれない。このように、宗教は統合の阻害要因ともなるし、その扱い次第で危険な存在ともなる。特に、民族的に異種なエスニック・グループが、別個の宗教を信仰しているような国家では、宗教とそれによる統合、統治は、きわめて敏感な問題を孕むことになる。その意味でも、マレーシアの統合をめぐる議論において、宗教を扱うことの難しさを認識している。

以上の理由の他、本論は、そもそもマレーシアの統合はどのようにして果たされてきたのかを探求しようとするものであり、「統合」を前提とした議論を展開してきた。その点においても、マレーシアは、宗教的な統一を目指していないことを前提に、統合の阻害要因ともなり得る宗教について論ずることは、本研究の主旨にそぐわないと思われる。そこで、ここでは宗教の問題に触れないことをお断りしておきたい。

調査、研究については、日本国内で文献、資料の収集、分析、検討、考察を行う一方、

マレーシア現地においてフィールドワークによる調査を行った。フィールドワークは、1～2年毎に、クアラルンプールと華人が多いジョホールバルやペナン等で、資料収集、メディアのチェック等を実施した。

本論文の各章は、第2章以外は、既に大学院で研究発表した上で、研究紀要に掲載した論文に加筆修正したものである。また、第2章については、大学院において研究発表したものをもとに書き下ろしたものである。初出は、以下の通りである。

- 第1章 「統合をめぐる理論の検討とマレーシアにおけるその事例的考察」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第14輯、2021年3月
- 第2章 「マレーシアのコミュニケーション政策」武蔵野学院大学大学院研究発表会、2015年2月18日
「国民統合におけるコミュニケーション政策の役割—マレーシアのテレビ放送と言語の政策を例にして—」武蔵野学院大学大学院研究発表会、2021年2月10日
- 第3章 「マレーシア中華系住民の移住と定住の歴史過程」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第7輯、2014年3月
「マレーシアにおける対華人政策について」武蔵野学院大学大学院研究発表会、2013年7月18日
- 第4章 「多民族国家・マレーシアを構成するエスニック・グループの社会文化的背景」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第9輯、2016年3月
「マレーシア華人のエスニシティ」武蔵野学院大学大学院研究発表会、2014年7月17日
- 第5章 「多民族国家・マレーシアのエスニック・グループとナショナル・アイデンティティに関する一考察」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第10輯、2017年3月
「マレーシアの国家統合をめぐる華人政策に関する研究」武蔵野学院大学大学院研究発表会、2015年7月30日
「マレーシアの開発とイスラーム化政策」武蔵野学院大学大学院研究発表会、2017年2月22日
- 第6章 「マレーシアの言語政策」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第8輯、2015

年 3 月

「マレーシアの社会統合に向けた言語政策」武蔵野学院大学大学院研究発表
会、2014 年 2 月 19 日

第 7 章 「マレーシアの国家発展においてマス・メディアに期待される役割」『武蔵
野学院大学大学院研究紀要』、第 12 輯、2019 年 3 月

「マレーシアにおけるマス・メディアの状況と政策」武蔵野学院大学大学院
研究発表会、2016 年 2 月 18 日

「マレーシアにおけるマス・メディア政策と主流メディア」武蔵野学院大学
大学院研究発表会、2016 年 7 月 21 日)

第 8 章 「マレーシアの国家建設における華人の貢献」『武蔵野学院大学大学院研究
紀要』、第 13 輯、2020 年 3 月

「マレーシアの国家統合をめぐる華人政策に関する研究—華人の役割」武蔵
野学院大学大学院研究発表会、2019 年 7 月 25 日

各章の概要は、次のとおりである。

第 1 章では、まず、古典的な統合論で論じられた統合をマレーシアの統合過程に即して批判的に検討し、それを踏まえて改めてマレーシアの統合を考察する。次に、多元社会における多極共存的民主主義の議論に沿って多極共存的な体制のあり様、要件等を分析し、かつてこれに類する体制を敷いたマレーシアの経験から得られた課題を検証する。そして、最後に文化的多元主義、多文化主義の体制、政策、あるいは主張に関する議論を検討し、それらがマレーシア社会の統合の指標となる可能性について考察する。

第 2 章は、コミュニケーションとコミュニケーション政策について検討し、国家統合の問題におけるコミュニケーション政策の有意性を論じた上で、マレーシアのケースにあてはめて、コミュニケーション政策とそれに伴い必要と思われる言語政策について考察する。実際に、マレーシアでは国民形成に向けて、どのようなコミュニケーション政策が実施されてきたのかについて、テレビ放送と言語をめぐる二つの政策に焦点を当て、分析、検討する。

第 3 章では、マレーシアにおける中華系住民の定住の歴史を二つの時期に分けて概観し、さらに華人のナショナリズムと帰属意識の変容について述べる。また、華人の拠点
が植民地時代からほとんど変化していないことを明らかにし、最新の選挙結果を見なが

ら、政治参加状況を論ずる。さらに、他のエスニック・グループとの関係を考察し、華人が定住していった様相についても触れる。

第4章は、多民族国家におけるエスニシティとエスニック・グループの概念と定義について考察し、マレーシア社会を構成するエスニック・グループの構成と歴史的な背景、特に華人グループの特徴について論ずる。マレーシアでは、直接的な同化政策ではなく、マレー人の比率を維持することによって、各エスニック・グループが独自に文化や言語を維持しつつ、マレーシアを構成し、発展させるに至ったことを述べる。

第5章では、ナショナリズムの概念と定義について概観した後、マレーシアのナショナル・アイデンティティに対するエスニック・グループ、エスニック・アイデンティティの影響力について述べる。さらにマレーシアが推し進めたイスラーム化と近代化政策について考察し、最後に現在のマレーシアにおけるナショナル・アイデンティティについて論ずる。

第6章では、改めて国家統合のための言語政策および多民族多文化国家における言語政策について検討する。次にマレーシアの言語政策の過程と華人への影響について、第2章で言及した論点をより詳細に考察する。さらに、マレーシアから分離独立までの歴史的背景を共にするシンガポールの言語政策も交えながら、マレーシアの言語政策がうまく機能したのか、成果はみられるのかを論ずる。

第7章では、マレーシアのマス・メディアは、1960年の独立以降、積極的な政府の関与により、政党色を強めるイデオロギー、政策の下に成長したこと、厳しい法の下に活動を制限されていることを述べる。その背景にはアジア的価値としてのマス・メディアの社会的責任が重視され、西洋的なマス・メディアの役割とは一線を画してきたことがある。しかし、結果として①厳しい法規制、②メディア企業の巨大化、独占化③政府与党との癒着を強固にし、エスニック・マイノリティにとって、彼らの文化、言語がマレー文化、イスラーム、マレーシア語よりも下位に置かれている実態について考察する。

第8章は、マレーシア華人が国家の発展にどのような影響を与えたのかについて論ずる。経済的貢献、教育的・文化的貢献、政治的貢献についてそれぞれ俯瞰し、華人が争いを選ばず、マレーシアに根付こうとしたことで、結果として華人がマレーシアの発展に大きな貢献をしたことを述べる。

終章においては、改めてマレーシアの国民形成における様態とコミュニケーション政策の役割について検討し、マレーシアの統合について、また華人にとっての統合につい

て考察し、まとめる。

なお、各章は、執筆後数年を経過しており、内容と事実関係が多少古くなっている面があるのは否めない。この点については、加筆修正を行い、状況や情勢が大きく変化した事柄については、注において一部説明を加える。

最後に、用語について少し説明を加えたい。

まず、マレーシアという国名であるが、当地は、歴史的にマラヤと呼称され、ボルネオを除くマレー半島を指す。1957年の独立時の国名は、マラヤ連邦であり、マレーシアという国名になったのは1963年である。本論では、「マレーシア」は、1963年以降の事象および、相対的に現在の国家としてのマレーシアを表し、「マラヤ」は、1957年の独立前後および、歴史的経過におけるマレー半島を指すこととする。

次に、中国（台湾を含む）からの移民、移住者については、以下のように定義し、使い分ける。

「中華系住民」：中国、台湾が建国されるより以前に移民した者。

「海峡華人」：中華系住民のうち、現地女性と通婚し、生まれた子どもたちとその末裔。19世紀にペナンやジョホールなど海峡地域に移り、イギリスの統治に協力したエリートたちを指す。

「華僑」：各地域の方言も含む中国語を話し、現在の中国・台湾地域の出身者からなる移民で、国籍、文化習慣ともに中国文化を継承する漢民族（戦後、中華人民共和国（中国）や中華民国（台湾）の国籍を取得した人も含む）

「華人」：現在の中国・台湾地域の出身者からなる移民で、文化習慣言語を問わず、居住地域のみを国籍を持つ者。

「華裔」：中国本土外の漢民族系移民。国籍による違いはない（中国語では、中華の末裔という意味）。

「中国系住民」：戦後、中華人民共和国建国後、移民した者。

次に、中国語については、以下のように定義し、使い分ける。

「華語」：華語は、東南アジアで用いられる中国語の標準語を指す。本論では中国語方言との違いを表すため、共通語となる標準中国語を華語とする。

「中国語方言」：マレーシア華人の言語は、福建語、客家語、広東語、潮州語、海南語を主に、さらに方言によって細分化されるため、本論では中国語方言とする。

「中国語」：華語、中国語方言をまとめて表す。

また、政党については、次のように表記する。

「統一マレー人国民組織（United Malays National Organisation）」は、UMNO。

「マラヤ華人協会（Malayan Chinese Association）」は、MCA。

「マラヤ・インド人会議（Malaya Indian Congress）」は、MIC。

「UMNO、MCA、MICの協力体制（the Alliance）」は、アライアンス

「国民戦線（*Barisan Nasional*⁶：バリサン・ナショナル）は、BN。

以上の諸点を踏まえて、論を進めることにしたい。

注

¹ かつてマハティール首相が、ルック・イースト政策を掲げ、日本を手本に経済発展を志向したという経緯もあり、日本とマレーシアは、良好な関係にあるといえる。当国はわが国にとってもきわめて重要な国家であることはいうまでもない。本研究は、特に華人の統合という視点に立って、マレーシアの国家と国民の成り立ちについて、考察を加えようとしたものであり、その意味において、本大学院の国際コミュニケーション研究科日中コミュニケーション専攻の主旨に沿うものと考え

る。
なお、本論以外に、筆者がまとめた日中コミュニケーションに関わる研究として、「日中の国際教育交流に関する考察」『日本経営品質学会誌オンライン』2015年12月がある。

² 広辞苑には、統一:多くものを1つに統べること。統べ合わせて支配すること。統合:2つ以上のものを1つに統べ合わせること。統一、とある。新村出編『広辞苑第4版』岩波書店、1991年。

³ 石川一雄『エスノナショナリズムと政治統合』有信堂高文社、1994年、236頁。

⁴ 本多周爾『国際コミュニケーションの政治学』春風社、2017年、257～274頁。

⁵ マレーシア連邦憲法第11条、宗教（信仰）の自由。

⁶ 本論では、基本的に人名を除いて、マレーシア語、マレー語の表記には、斜体を用いる。